

③ W1 トレンチ

墳丘の西半、E 1 トレンチの反対側に設定したトレンチで、玄室右側壁の背面に幅1m、長さ7mの規模で設定した。

このトレンチはE 1 トレンチ同様、墳丘の据部の確定、墓壙および封土と流土の関係などを把握することを目的とし、築造基盤層までを発掘対象とした。以下、北壁面の観察に重点を置いて所見を記述する。(第18図中・下段)

地山はトレンチの東半で地表下60cm、西半で地表下85cmの深さにあり、南西方に向かって緩やかに傾斜する。地山中には墳丘の内外を問わず、1m大や30~40cm規模の花崗岩が密在し、上面ないし上半分を露出した状態であり、築造に際してこれらの石塊が除去された形跡はない。地山面の標高はトレンチ内最高所で81.8mを測る。

地山直上に24層が堆積する。厚さ20~30cmを計測するが、上面は整地されたことも考えられる程フラットで、標高82.0~82.1mの位置にある。24層は地山起源の土粒を含む自然堆積土であるが、トレンチの西端では人為的に削去された状況を呈し、東端は石室壁体を構築するための墓壙掘開に際し、掘り込まれて消失し、E 1 トレンチには連続していない。地山面に露呈した石塊群は、この24層により覆われた形となり、東側では24層が墓壙の本来の肩を形成している。以上の所見から、24層は本墳築造以前の旧地表土と推定され、墳丘の盛土にあたって、据部と墓壙部分が掘り込まれ、築造面に若干の整地が加えられたものと考えられる。

右側壁材の設置に際して裏込めに供した墓壙の規模は高さ60cmを測り、地山自体も40cm前後掘り込まれている。墓壙の肩はさほど銳利ではなく、墓壙内の裏込め土は2層から成る。下層(14層)の25cmは暗黄色の砂質土でしまりが悪い。肩レベルとほぼ上面が合致する上層(8層)の45cmは灰黄褐色疊混り砂質土でやはりしまりに欠ける。裏込めの土には通水性も必要であり、意識的にこの種の砂土が用いられたと考えられる。下層土は基底石の下半を栗石とともに背後から支持するもので、上層はトレンチ内にかかった基底石を完全に覆うものである。南壁では上・下層間に小石塊が認められる。

当トレンチで観察される封土は、整地工事により削平を受けているため、4層と6層の2枚のみである。下部の6層は墳丘裾から築造面を完全に覆い、玄室側壁の2石目の裏込め土を兼ねるもので、墳丘中心部では淡灰黄色粘性細砂質土、裾部に至ると粘り気がやや乏しくなる。整地面と化した4層は淡黄褐色の砂質土で、断面では6層とともに墳丘外表面ラインが確認できる。また、4・6層の東端には玄室壁体の2石目の抜去痕が残存しており、遊離してしまった石材のおよその規模(奥行50~60cm程度)を推察することが可能である。

60・61・62層の3層は墳丘外堆積土で、古墳築造後の環境の経時変化で堆積したものと思われる。このうち62層は粗砂から成り、築造直後に洪水様の流砂が周辺を覆ったことを想像させる。

なお、墳丘立上りのラインは、石室主軸線から計測して、墳裾で5.8m、カット面で3.8mである。

(森岡)

④ W 2 トレンチ

漢道右側壁の状態と墳丘西半の築成状況を観察するため設けられたトレンチで、北壁でその土層断面図を作成した。このトレンチの北壁はG基準線に沿い、東側に漢道右側壁があって、南北間は約2.5mを測る。その南端と北壁西端が直接結ばれ、トレンチの形状は直角三角形を呈する。

土層の観察は、幅約2.7mに亘って行われ、北壁の西端は主軸ラインより、約3.7m離れている。その上端は標高82.4~82.3mの間である。

W 1 トレンチと同様、墳丘の封土を中心と観察することができた。上端に薄い腐蝕土層が存在し、その直下は8層と類似した4層が、石室寄りには8層が6層と混在して存在する。4層との間には20cm前後の礫がみられ、4層自身も下部ほど粘性が強まるものの、8層と同一とみてさしつかえないであろう。

8層下には14層が存在し、その西端は地山に接している。W 1 トレンチでも古墳築造以前の旧地表とみられた24層が6層の下やや石室寄りにある。漢道側壁裏込め土には、8層がみられ、その下部には地山の墓壙ホリカタを看取取ることができる。(西尾)

⑤ NE トレンチ

石室背面の状況と旧地形を把握する目的で、P 1 を基準に北東方向に走行する長さ12.2m、幅1.2mのトレンチを設定した。

地山面はトレンチ中央部からやや東より最低所で80.85mを測り、最高所の南西端との比高差が93cmで、地山面は花崗岩塊によって凹凸が認められるものの東方へ緩やかに傾斜していることが看取される。東部では、地山漸移層中に直径10cm前後の円礫が密集する箇所もみられ、それ以東では地山が再び緩やかに上昇する。

墳丘裾部は、北壁土層断面でトレンチの石室側小口より3.9m、南壁で4.0mを計測する。裾部は古墳築造時の地表面を大幅に改変され、勾配47度の傾斜を有して立ち上がる。また、墳端を画するものと考えられる幅80cm、深さ15cmの条溝が検出された。この条溝は、埋土に淡灰茶褐色粘性砂質土層(63層)を有し、E 1 トレンチでも埋土に同一層を有する条溝が観察されたが、W 1 トレンチでは流石が該当付近に密集しており不明である。この条溝を被覆する形で淡黄白色砂質土層(55層)が堆積している。両層とも封土崩壊後の流入堆積土と理解でき、層相から粘性を帯びる63層は3層に起源する下部封土の流入堆積土とみられよう。

トレンチの石室側小口より70cmの所で古墳築造時の地表面を切り込む墓壙を検出した。石室背面まで検出しておらず詳細は不明であるが、石室基底部のレベルから考えると地山まで掘削したものと推測される。埋土は、上層に淡灰茶色粘性砂質土層(16層)が堆積し、栗石は認められなかった。一方、E 1 トレンチでは墓壙は検出されておらず、変則的な築造法がみられる。それは、E 1 トレンチ付近の旧地形がかなり東方向に傾斜し小谷に落ちていたため、必然的に地形に制約された築造プランが必要となつたのであろう。

流入した封土起源土上層はシルト、砂の経年堆積を示し、淡灰茶色シルト層(64層)からは須恵器杯(第28図34)が検出されている。その下層に層厚約50cmの粗砂層(26層)が認められ、中央部ではこの層中に巨石塊が遺存している。

この砂層上層の粗砂層(54層)を基盤として、幅3.2m、深さ65cmの断面逆台形を呈する土壤が壁面観察された。土壤内に遺存する花崗岩塊は、砂層堆積に伴った流石で、矢穴の痕跡が認められることから、近世大坂城の石垣石材として利用されたと思われる。土壤の性格は、石材抜き取りに伴うものと推測でき、土壤基底部で検出された長軸45cm、短軸20cm、深さ10cmの梢円形プランを呈するピットも石材抜き取りに伴うものであろう。この層が近世の地表面と考えると、トレント東端でやや上昇していることが認められ、小谷の最低所が中央やや北よりの部分に相当するものと考えられる。

近世には、地山面で認められた小谷地形形成以後、流水、漏水状況を繰り返し、谷部がほぼ完全に埋没し、墳丘下部は埋積土によって視認不可能となったことが窺える。ただ、近世にどこまで墳丘が遺存していたかは明確にし得ないが、石室崩壊以前の石室状況をみると、天井石に矢穴の入ったものがみられることから、上部封土は既に流出や削平によって天井石が露呈する状況にまで至っていたと考えられる。

(和田)

⑥ Nトレント

奥壁部の損壊状況と墓壙・墳丘の様相を把握する目的で、中軸基準線を延長させたラインを基準として、奥壁背面から北方向に長さ8.7mで設定した。西側は第1石材投棄壙に当たっているため、実際には東壁土層断面のみのトレント調査となる。掘削深度は1mを測る。

地山は、最高値81.97mを測る北端から南に比高差50cmで南傾す。地山面はかなりの凹凸が認められ、凹部にはNEトレントでも観察される地山漸移層(27層)が堆積する。地山の層相は、下部に行くに従って花崗岩巨石塊が散在する傾向を示す。

墳丘裾部は中軸P1より北に1.2mの所で認められ、裾部は14度の勾配を示し、上部は勾配34度の傾斜で立ち上がる。その変換部では、花崗岩の立石が認められる。

この石材は奥壁相当部より北170cmにあり、厚さ11~24cm、高さ45cmの断面台形を示す。ホリカタは、古墳築造時の地表面を垂直に地山面まで掘り込み、石材基底部に奥壁裏込め土が入り込んでいることから、奥壁裏込め形成以後に設置されたことが考えられる。また、規模については、西側を第1石材投棄壙で削平され不明であるが、NEトレント、W1トレントまでは及んでいないことを考えると、墳丘北端に限定して遺存していることが理解できる。そして、古墳築造後、この石材が視認できたかについては、残存封土状況からみて封土中に入っていた可能性が高い。

以上の事実関係からこの石材の性格は、奥壁裏込め形成以後、封土成形以前のもので、古墳に伴う施設であることは明確である。また、E1トレントで認められた内区列石の様相とは異なり、墓壙背後に古墳築造以前の堆積層を幅50cm残し、掘り込んでいることから壁体保護施設とする公算は薄いといえる。そして、この石材が墳丘勾配の変換部に相当する所に遺存することから、こ

の石材の意図が古墳建造に伴う墳丘段状築成の区画の一部を示すものと理解され、最終的に墳丘に石材先端を露出する必要性はなくなる。

墓壙は、その大半を奥壁損壊時に破壊され、奥壁全体の様相を知ることは不可能であるが、トレンチ北壁で損壊を免れた部分の所見では、中軸P1より南に148cmの所で認められ、奥壁相当部で奥壁石材を安置させる振り込みが存在する。周辺部で栗石と思われる石材も散在するが、原位置を移動している。

墳丘外の堆積状況は、地形に同調した砂質系の堆積土で、NEトレンチで認められた砂層系のものは観察されず、流入の時差による、漸移的な経年堆積土と判断される。墳丘下部を被覆する暗黄色砂質土層(50層)から須恵器片(第28図35)を検出した。
(和田)

⑦ 主軸探査トレンチT1～5

調査開始時、大部分の盛土は取り除かれていたものの、依然として石室は埋没しており、その位置がつかめなかった。そこで、石室の位置と旧表土の遺存状態を確かめるために、主軸探査トレンチT1～5を設定、西よりT3、T1、T4、T2、T5と呼称することにした(第16図)。T1～3は石室の主軸と思われる方位(北北東～南南西)に並行して、T4・5は北東～南西方向に掘削した。T1・2は4.5×1m、T3～5は4×1mを測る。T1より多くの花崗岩塊が検出され、石室の中心であることが推定されたため、T1を中心に全面掘削に切り替え、旧表土まで掘り下げた。T5については現地表下0.9mまで掘削し、旧表土が良好に遺存していることと、南東方向に落ち込みが始まっていることを確認した。いずれのトレンチからも遺物は出土しなかった。
(後神)

(4) 墳丘

本墳が破壊される以前の状況は、岩ヶ平支群の中でも早くから古墳として知られ、比較的墳丘の原形をとどめているものであった。しかし、調査に入った現状においては墳丘上部盛装封土、外部表飾封土と下部基盤封土の一部は削平されていることが考えられる。そのため地山と封土との関係を調べる目的で、N、NE、E1、E2、W1、W2のトレンチを設定した。その結果、N、NE、E1、W1で墳丘裾部と墳丘立上りが、N、NE、W1、W2で墓壙を検出した。

墳丘裾部はE1北壁、W1南壁でそれぞれ石室主軸基準線より5.4m、5.8mを測る。また、N北壁ではトレンチの石室側小口上端から3.9m、Nで中軸P1から1.2mに裾部が遺存している。

以上の各トレンチ所見と残存する石室法量から考えて、墳形は南北方向に長軸をもつ椭円形で、東西約10.5m、南北13m前後の規模を有する古墳と推定される。この数値から推測すれば墳丘南西部の裾部は当該地西側の敷地内に入り込む公算が高く、古墳をのせる派生隆起の稜線付近に相当するものと理解されよう。このことは、現状地形からも読み取れるように、本墳の主軸が派生隆起の後線からやや東側にずれているという観察の傍証となろう。

本墳の立地は、そのまま構築法にも影響を及ぼしていることが、土層の観察から看取される。石室西側は、本墳構築時に古墳時代の地表面を大幅に削平し、墓壙の掘り込みと地山面の整形行為がなされている。地山面直上には、粘性を帯びた地山起源土を混じえる6層が下部基盤封土として盛られている。しかし、東側は6層の遺存がなく、壁体背後で一部古墳時代の地表面が削られているが、以東裾部までは地表面をそのまま利用し、4層が置かれている。

東側のNEを除くE1、E2では、墓壙の掘り込みが認められず、4層が盛られる以前に5～14層の粘性土と砂質土の互層堆積が観察された。これらの層は堅緻で版築風に仕上げ、層中に石積み造作が行なわれるなど、地山の掘り込みに十分相当するような外護的様相をもっている。

上部封土については、西側で削平されているが、3層が石室両側を覆っていたものと考えられる。その3層に起因する土壤は、NE、W1、E1の54層・55層・57層・63層などで古墳構築後の墳丘出土と考えられる。これらの土壤は付近の自然堆積土や客土とは異なり、不純物を含まない、数種の土壤からなっている。

上部封土は石室両側で対応関係にあるが、下部封土は主として石室東側に充填され、土量もはるかに多く、入念な築成が行われている。

NE、E1墳丘裾部においては、人為的な浅い堀割状の凹みが認められる。また、E1南壁では四部の東肩に花崗岩塊が遺存する。この石は古墳築造時の旧地表面に入り込まれ、肩として利用されている。埋土は63層单一で、とくにE1で破碎された須恵器壺片が集中的に検出された。

(和田)

(5) 石室

① 発掘過程

調査開始後2日目にして主体部の位置が判明し、石室主軸が把握できたので、石室に対する調査方針を定めた。

まず石室の主軸基準線を設定し、P1・P2とした。この基準線は磁北線と交角5度で交わり、僅かに東に振っている。P1-P2間はP1を原点として1m間隔でポイントを落とし、それぞれそのポイントを通り、主軸基準線と直交する東西方向の基準線を割付、P1を通る線をAラインとし、以下、北からB・C……Jの10本のラインを設けた。

他方、主軸基準線の東西において1mおきにこれと平行する仮設基準線を作り、それぞれ東1・東2・東3……、西1・西2・西3……のラインと呼ぶことにした。石室内上層部と墳丘に設けた各トレンチで出土する遺物の取上げは、原則的にこの方眼基準線を用いることとし、1m×1mの区画については、北東隅基準線の交点を組合せてA東1区、B西3区などと名称づけることとした。

しかし、このグリッドは、石室内部の発掘経過を記録するのに不便な点が多くいたため、床面



第20図 石室内転落石の状況

の精査では採用していない。

石室の残存壁体上面を露呈させた段階で、既に奥壁を含め壁石の構成を欠く部分が認められたが、残存状態の一部が判明したので、縮尺20分の1の現況平面図を作成した(第20図)。

石室内の発掘は、整地工事を受ける前の埋積土上面までを第1段階とし、原位置を移動した石材などの陥入状況を主に調べるため、西側半分のみ土砂を除去した。その後、石室の縱断を観察しつつ表面をすべて露呈させ、落石を重機で除石し、奥壁の抜去や玄門の位置が確実視できるような深さに達したので、玄室・羨道をそれぞれ4区、計8区に分け、土層観察用の小畦を残して床面までの発掘を進めた。

この第2段階の排土作業で、玄室の床面が大半失われていること、羨道部の堆積が非常に安定していること、盜掘痕が複数して各所に存在することなどが判明したため、精査の度合を各区の状況に即応して調査を進めた。

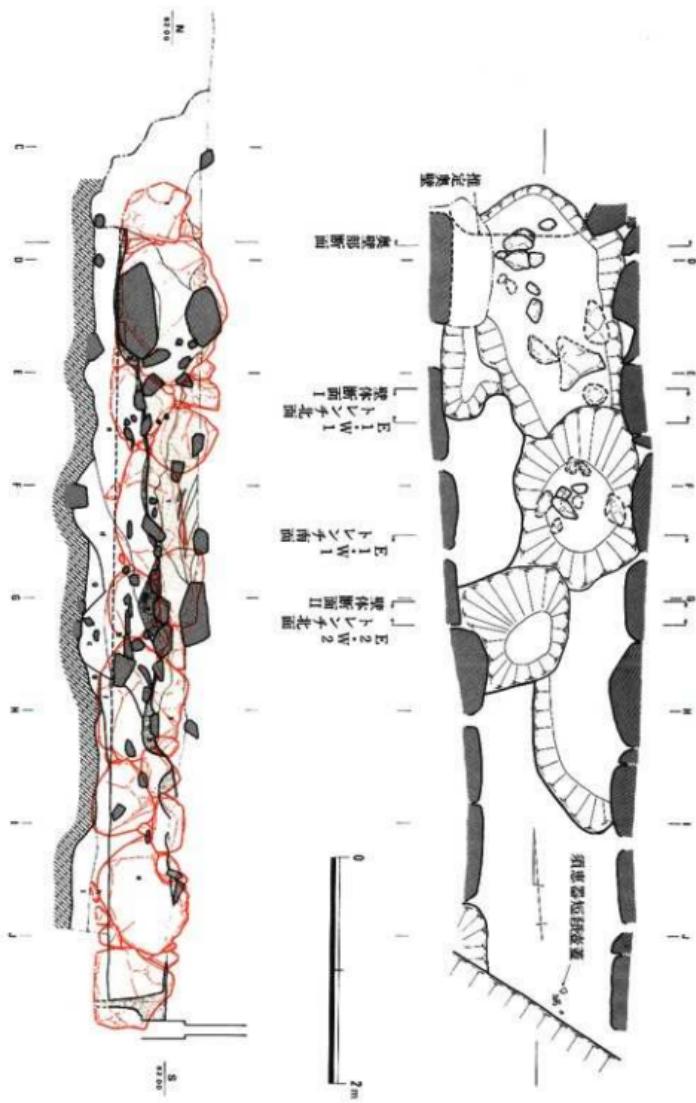
石室基底については、壁体残存部を将来保護するため、地山面までの追求は最小限に留めた。

(森岡)

② 石室内堆積土と盜掘痕

石室内の堆積土は大きく三つに分かれる(第21図)。

最上層は、先に第1段階として除去した旧表土より上の層で、整地工事による石室損壊時の崩落土層である。灰黒色土や枯れ葉と黄褐色粘質土が、落ち込んだ石室用材とともに複雑かつ無秩序な堆積をなしており、石室壁体の上半部が重機によって一気に壊されたのち、平らに整地された状況をよく示している。損壊前の石室内地表面は、関係者の記憶や旧状の写真から奥に向かって傾斜し奥壁部に大きな盜掘痕のあったことがわかっている。これを裏付けるように、腐食しきらない落ち葉や小枝、一部にゴミ等も含む旧表土層が、北に向かって緩やかに傾斜する面が見出



第21図 石室内堆積土断面図及び平面プラン実測図

された。この面には、損壊初期に落ちた石室用材と思われる大小の石が、土を嘔まずに多数密着しており、最奥部は盜掘壙と思われる部分が一段下がって石室幅全部を占める石が落ち込んでいた。奥壁は最後に抜かれたとみえ、整地後の地表から地山にまで達する掘り込みがあり、その内部は腐食土を混える締まりの悪い黄色の砂質土があって、北西側は墓壙を壊して第一石材投棄壙につながっていた。

第二の層は、中世以降現代に至るまでの盜掘等による攪乱層である。この盜掘壙は、腐食土やゴミ・現代遺物を多数含む新しい(近現代の)ものが幾つも錯綜して石室内に広がっており、そのそれぞれを分離することが不可能なほど、すさまじいものであった。最終的には袖部付近より奥の石室床面はその8割以上が近代以降に失われていることが判明した。奥壁沿いに見られた大きな乱掘壙もその最終段階に属するものであろう。

第三の層は、羨道部のはほ全域と玄室内右側壁よりの一部にのみみられたもので、古墳築造後比較的初期に堆積したものと思われる。羨道部は主として混じりの無い黄色系の細砂質土からなり、古い時期に一気に埋没したあとほとんど人手が加わっていないと思われ、盜掘壙も玄室よりの一部を除きみられなかった。

(古川)

③ 遺物出土状況

石室内の乱掘が著しく、ほとんどの遺物は盜掘攪乱層の中に散乱状態で含まれていた。その大半は古墳時代須恵器の杯類と中世の瓦器碗であるが、細片化が甚だしく、後の整理過程における個体識別と復元に困難を極めるものであった。おそらくは、近代以降の盜掘が繰り返される中で破片は見捨てられ、さらに細片化・散乱化が進んでいったのだろうと思われる。さらに、羨道部の床面付近に太い松の根が横たわっており、この根による土層の混乱があったことも付記しておくべきではない。ただ、羨道部で中世の再利用面と考えられる部分(F層上面)があり、瓦器碗片が若干検出されている(図版14上段左上)。また、その北側の袖部付近の攪乱層には遺物の集中が認められ、元来このあたりに多くの遺物が置かれていたものと考えてよいであろう。

一方、築造当初ないし追葬時点の床面と考えられる安定した面が、羨道部と玄室右側壁よりの一部にみられたが、その面上の大半ははあたかも清掃されたごとくに遺物の破片もなく、唯一羨道南端部に須恵器短頸壺(第26図1)が約2分の1破片として検出されている。これは、開口部に近い位置からみて、初券か追券かはともかく葬送儀礼に伴う可能性が高い。

(古川)

④ 墓体構造

本墳の内部主体は、主軸をN 5°E にとる、袖がやや退化した右片袖式の横穴式石室である。玄室の長さは3.5m、幅は玄門部で1.4m、奥壁部で1.5mを測る(第22~24図)。両側壁とも損壊のため、最高部で床面から1mほど遺存するのみであるが、記録などから1.5m以上の玄室高が推定される。玄室床面積はおよそ5.2m²である。羨道は現状で左側壁が3.6m、右側壁が2.4m遺存するが、羨門部が敷地境界のブロック塀にかかっているため、さらに長かったものと思われる。

その幅は1.1mだが、玄門はこれを強調するがごとく左側壁の根石が内部へやや張り出して据えられているため、1.05mと最も狭くなっている。岩ヶ平古墳群の他墳と比較すると石室は長さにおいて遜色はないものの、有袖石室墳の中では比較的小型の部類に属している。

袖幅は0.25mを測るが、袖石は平面的に丸みを帯びたものが用られているため、見掛けより退化したイメージを受ける。また、上部が先細りとなっており、通常の有袖式石室のように袖石が重箱積みされたり、直接前壁を支持するような立体的なあり方を示していない。損壊で失われてしまったが、石室上部の壁体ではさらに袖が不明瞭なものとなっていたと推測される。あるいは、全く袖を意識しないで積まれていたかもしれない、その場合は右側壁上部壁面は玄室・羨道の区別なくゆるい弧を描き連続したものであったろう。

石室は、八十塚古墳群の他の古墳と同様、すべて六甲花崗岩で構築されている。また、閉塞施設や排水溝・棺台などの床面施設については、検出された石室床面の約8割が攪乱や盗掘などで荒らされていたため、確認できなかった。

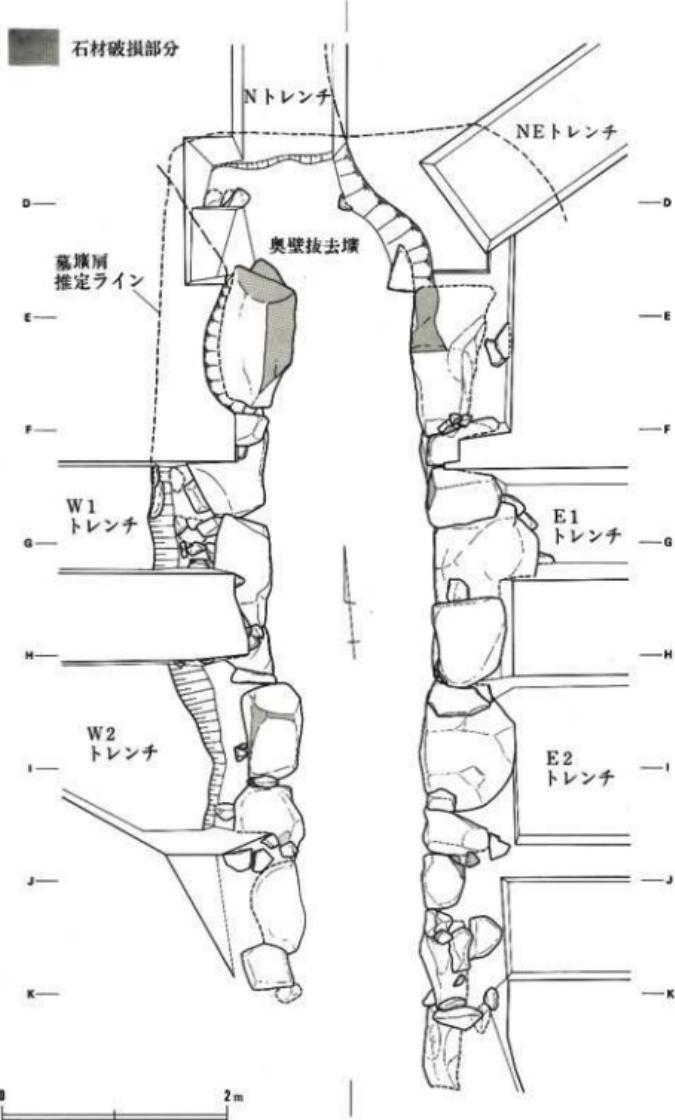
測定は不明なものも多いが、石室の構造からみるかぎり、羨道長が玄室長を超えていること、袖が退化傾向にあることなどから、6世紀の終わり頃の築造と推定できる。

次に、石室の構築過程に沿って壁体の構造を記述したい。

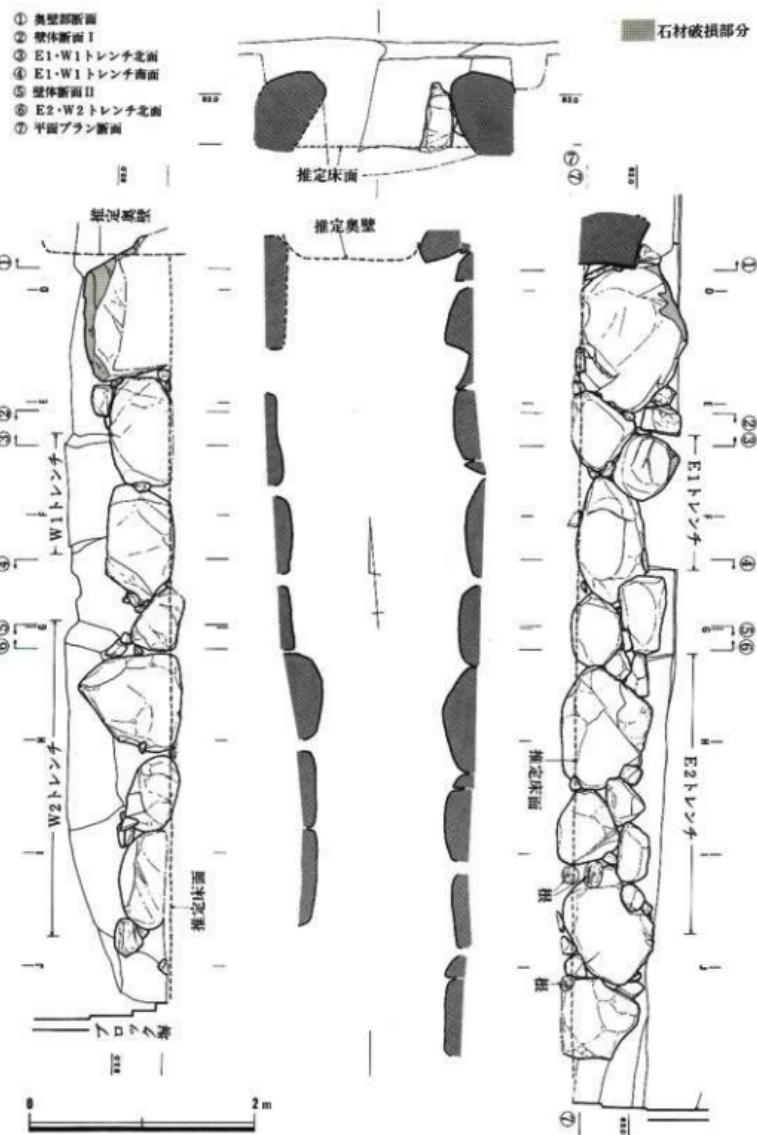
本墳の構築には、南に伸びる小さな支尾根上、稜線から少し東側にはずれた位置が選ばれた。そして、表土を剥がし整地が行なわれた。その整地基準面は標高82.0~82.1mで、西側では24層上面、北側では22層上面にあたっている。しかし、斜面にあたる東側はこの限りではなく、緩やかなスロープ状に整地されたものと思われる。その面は25層上面である。

さらに、石室の主軸が設定され、墓壙が掘り込まれた。西側では地山部分約40cmを含めて深さ60cmまで掘られ、奥壁部分でも同様に約60cmまで掘削されたが、ここでは旧表土が厚かったため、地山の掘削は10~20cm程度に留まっている。東側でも掘り込まれたかもしれないが、明瞭ではない。もともとレベルが低かったため、地山を積極的に掘削することは避け、その替わりに小型の石を壁に平行に集積することで、左側壁の背後を補強する墓壙状の施設を構築し、墓壙の機能を肩替わりさせたものと推測される。この集石の延長は未掘のため不明ではあるが、およそ1.3mの幅をもち、その上端レベルは整地面(墓壙肩)にはほぼ等しい。径30cm前後の石と10~15cm程度のものが認められる。なお、石室の主軸は尾根稜線の方向と平行には設定されていない。

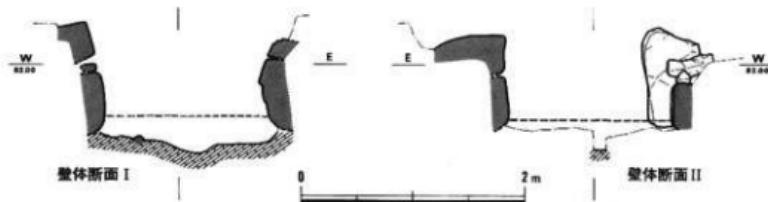
根石は、玄室西側壁においては墓壙肩部から1mほど内側に、羨道部でも0.75mほど内側に内壁面が位置するように設置された。奥壁では主用石の内壁面が墓壙の肩からおよそ1.3m離れている。東側壁では内壁面から約2mと後退した位置に集石の西端ラインがあり、これを墓壙の替わりとみなすなら、位置的にはやや特異な感じがする。裏込めには石室西側で2種の砂質土が認められるが、東側ではこれが5種以上に増える。根石の設置は地山面を掘り窪めて安定を図っているものと、地山面に置土しているものとが見受けられる。これは石材の大小に関係するとは言い難い面がある。両側壁とも奥壁に接する根石や袖石、袖石と向かい合う左側壁の根石には、特に選ばれたらし大型の石材が用いられ、その間隙をかの4石よりはやや小振りな石材や、さら



第22図 石室上面図



第23図 石室展開図



第24図 石室壁体断面図

に小型のそれで埋めている。ただし、これは大型の根石が先行して設置されたことを意味するのではない。むしろ、大型石材安定のため、小型の石が先行して設置されている部分もある。この機能を受け持つ小型の根石には地山を掘り窪めて据え置かれたものが多い。実測図を見るかぎりでは、袖石が最初に設置されたのであろう。損壊で奥壁の主用石は原位置から動かされてしまったが、石室内最大クラスの石材が用いられていた。奥壁は地山面をやや掘り込んで据えられ、玄室幅に達しない部分を小型の石材で埋めている。

また、構築にあたって用材を両側壁に均等に割り振っていないため、左右の壁で構築法に違いが認められる。右側壁には比較的大型の石材がレンガ積みを意識して用いられているのに対し、左側壁は用材のばらつきが大きく、レンガ積みへの指向性は低い。しかし、袖石を除く根石は横位置に据えられ、2段目は小口積みにしており、壁体構築の常道は守られている。側壁材は2段目が部分的に残るだけなので、壁体の旧態を明らかにすることは不可能に近いが、記録を参照するかぎり、玄室の側壁はレンガ積みを指向した構築法が採られ、両側壁面ともやや内傾していたことが知りえる。

なお、出土土器から本石室は中世に再利用されたことが判るが、その時点において石室がどのような遺存状況を呈していたのかは想像の域を出ない。しかし、雨露をしのぐ場所として利用されたのなら数個の天井石は遺存し、多少なりとも封土が覆っていたものと思われる。また、NEトレーナーで検出された採石遺構が示すように、近世初頭には徳川大坂城再築に伴う採石行為で墳丘周囲が荒らされた。しかし、石室材からは必要とされた大きさの調整石は採れないため、それによって本墳が破壊されたとは考えにくい。ただし、本石室については、近世初頭よりも明らかに新しい時期の矢穴で割られた天井石1個が奥壁際に架構されていたほか、右側壁にも不自然な積みかたをされた部分があり、近世末から近代にかけて天井石の再構架を含めた修復が行なわれたことを知ることができる。なお、損壊以前にみられた天井石は、3個とも再架構したものであるという意見があることを付しておきたい。

(後神)

(6) 石材投棄壙

整地工事前の旧地表面を敷地の大半について露出させた結果、関係者の証言どおり、古墳損壊

に伴って遊離した石材を一括投棄した穴を2か所において検出した(第16図)。以下、検出順に番号を付し、その状況を報告する。

(森岡)

① 第1石材投棄壙

石室遺存部の北北西3~4mの所で検出をみた。長径約6m、短径約3.2m、深さ1.8mを測る平面橢円形の土壙で、重機により掘削されたものである。

この中からは天井石とみて大過ない巨石2個を含め、径0.7~1.0mの大型石材10個と径30~40cmを前後する中・小の石材が一時に投棄された状態で、隙間に入り込む土砂とともに充満して出土した。その大半は10号埴の壁体を構成した石材と判断され、小割石材を除く上部壁石の大きさと数量が知られよう。

(森岡)

② 第2石材投棄壙

E1トレンチ墳丘裾部から東1.6mに位置する。規模は長径4.7m、短径3.3m、深さ50cmの平面不整橢円形で、断面は皿状を呈する土壙である。

第1石材投棄壙の様相と異なり、直径1mの花崗岩円礫を主体に、石室用材十数個が確認された。そのうち奥壁用材と推定される板石1枚は、長辺145cm、短辺105cm、厚さ15~40cmを測るもので、現状では横位置に置かれていた可能性が強い。また、矢穴の入った石材1個も確認されている。

投棄壙内の石材はすべてが石室用材として使用されたものではなく、掘削以前に散在していた流入花崗岩塊が全体の約60%を占めている。周辺部が小谷地形を呈し、投棄壙がその底面付近に位置することからも、その集石状況は把握できることである。

(和田)

(7) 近世採石遺構

NEトレンチで、近世初頭の採石遺構を検出した。トレンチ調査の所見の項ともやや重複するが、若干の所見を記しておく。

NEトレンチは全長12.2mで設定したが、その中央やや東より、表土下約50cmで矢穴により割られた石が現れた。近辺ではこのような石は多数知られており、近世初頭の徳川大坂城再築に伴う残石ということが明白であったため、最初はそれ以上の注意を払わなかったが、土層断面観察の過程で、この石材を割って搬出するための掘り込み(採掘壙)の存在することが判明した。

石材は厚さ約40cm、長さ1m以上で、一見したところ半分以上が北西側の壁内に残っているようである。上面の矢穴で割られた面はもちろんのこと矢穴の穿たれた南西側の側面も割面で、その状況より大きな自然石から直方体の調整石を割り取った残り(端石)であることがわかる。土層断面観察によれば、採掘壙は長さ3.2m、深さ0.65mをはかり、51・53・54の各層を切って掘り込まれている。おそらく51・54層の上面が当時の地表面と考えられ、北東側は鋭く、南西側は緩



第25図 N E トレンチ検出の割石

材もそれらのうち特に大きなものが地表に露出していたのに目をつけたのではないか。

従来、このような矢穴石・割石や刻印の刻まれた石は近辺で多数知られていたが、その作業の具体的な状況を発掘調査という手段で確認した例がなく、採掘場の存在は推定されてはいたものの今回初めて検出したことになる。今後、この六麓荘・岩ヶ平周辺での発掘調査の際にはこのような採石遺構の存在も充分留意し、埋蔵文化財の視野の中に入れていく必要があるであろう。

(古川)

〔八十塚古墳群に関する主要文献 その3 1982年～1988年〕

- 森岡秀人 「八十塚古墳群発掘調査の成果と課題－岩ヶ平支群D小支群第19号墳の発掘調査と第27・30号墳確認調査の概要」<現地説明会資料> 芦屋市教育委員会 1982年
- 森岡秀人 他 「八十塚古墳群発掘調査概報－岩ヶ平支群D小支群西地区の緊急調査成果概要」(芦屋市文化財調査報告 第13集) 芦屋市教育委員会 1983年
- 藤岡弘 「八十塚古墳群岩ヶ平第22号墳確認調査結果の概要」(芦屋市遺跡調査記録No.16) 芦屋市教育委員会 1983年
- 森岡秀人 「阪神考古学規程(一)」『考古学研究』117号 考古学研究会 1983年
- 森岡秀人 「六甲山地東南麓の群集墳」『第1回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料』(財)大阪文化財センター 1983年
- 森岡秀人 「八十塚古墳群岩ヶ平支群第23・24・25・29号墳」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和56年度』 兵庫県教育委員会 1984年
- 森岡秀人 「表六甲東麓における群集墳の動静」『歴史と神戸』第125号 神戸史学会 1984年
- 藤岡弘 「八十塚古墳群岩ヶ平支群第19・27・30号墳」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』 兵庫県教育委員会 1985年
- 藤岡弘 「八十塚古墳群岩ヶ平支群(22号墳)」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』 兵庫県教育委員会 1986年
- 藤岡弘 「八十塚古墳群岩ヶ平第22号墳」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和59年度』 兵庫県教育委員会 1987年
- 森岡秀人 他 「八十塚岩ヶ平10号墳現地説明会ノート」 芦屋市教育委員会 1988年
- 森岡秀人 「古墳時代の芦屋地方(下)－近年の遺跡調査をふりかえって－」『兵庫県の歴史』 第24号 兵庫県 1988年

VI. 出 土 遺 物

出土遺物は、石室内・トレンチ内併せてコンテナ約5箱分である。以下、時代順に遺物の詳説を行うが、実測図は石室内資料を優先して掲げ、トレンチ資料を後に一括した。

(1) 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物はすべて須恵器で、圓化したもののうち石室内出土(1)～(15)、トレンチ内出土(33)～(35)、調査敷地内採集(36)(37)があるが、ここではまず前二者について述べる。

石室の遺物は、先に述べたごとく、そのほとんどが袖部付近の盜掘攢乱層(B・C・D層)中に著しく細片化して含まれていた(第26図)。そんな中で、(1)のみは淡道部南端の床面で検出されたもので、全体の2分の1程の破片である。蓋形の形態をなし、口径11.6cm、器高4.5cmを測る。なだらかな球面をなす天井部から大きく屈曲して体側部は直立し、口唇部はやや外反する。口径に対して器高がやや高いため短頸壺蓋と思われる。

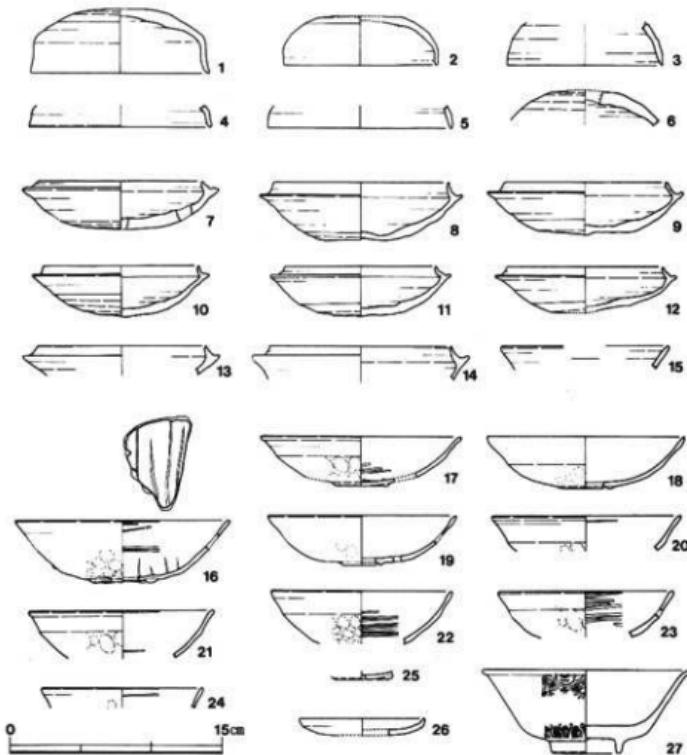
(2)～(15)は、いずれも盜掘攢乱層中に散乱していたもので、(8)～(12)のようにほぼ7～8割の破片を回収し完形に近いまでに復元できたものもあるが、ここに図示しえなかつた微細片も数多い。

(2)は杯蓋で、口径11.0cm、器高3.3cm。ヘラケズリを施す平らな天井部、ゆるやかに湾曲する斜面部、直立する口縁部が特徴的な器形である。(3)～(5)も杯蓋口縁部の細片で、(3)は球面に近い天井部、(4)は(2)と同じく平らな天井部をもつものであろう。

(7)～(14)は杯身であり、完形に近く復元できた(8)～(12)でみると、器径14～15cmをはかる(8)(9)と12～13cmの(10)(11)(12)ではっきりと形態差を認めることができる。前者はやや内傾の傾向を示すものまだしつかりした立ち上がりをもち、灰色系で硬質焼成。後者は著しく内傾したのち屈曲部をもって口端部を直立させる低い立ち上がりで、暗青灰色系の色調を示す。(14)は口縁部の小片であるが形態的には前者に一致し、(7)(13)は焼成があまく灰白色系軟質になっている点で他と異なるが、立ち上がりの低さからいえば後者暗青灰色系の一群と同時期の可能性が高い。

(15)は大きく外傾する口縁部の小片で、口径は十数cmになるとおもわれ、その形態から高杯か広口壺等が考えられる。

石室内出土の主な須恵器を陶邑古窯址群の中村編年¹¹⁾にあてはめると、(8)(9)はⅡ型式第4段階、(7)(10)(11)(12)はⅡ型式第5段階、(2)はⅡ型式第6段階に相当すると思われ、若干の型式差が認められる。(2)等を追跡に伴うものと考えることもできるが、出土状況からは確認でき



第26図 石室内出土土器実測図

ておらず、ここでは6世紀末～7世紀始めの築造を推定するにとどめておきたい。

次に、トレンチ内出土の遺物について述べる(第28図)。

(33)は、E 1 トレンチ63層(淡灰茶褐色粘性砂質土)内に破砕された状態で検出された甌である。口頸部は全体に強いヨコナデ調整がなされ、直立したのち大きく外反して口端部は下面に段差をもって肥厚させる。体部はやや上位に最大径をもつ丸底球形にちかいもので、内面に青海波状当て具痕、外面にはカキ目と共に先行する平行タタキの痕跡が顕著に残る。

この体部の成形・調整痕跡を仔細に観察すると、内外面とも上中下の三部位で様相が異なっている。下位は下端から14cm前後の範囲で、内面は径5cmほどの同心円(青海波状)當て具痕が極めて顕著に残り、ナデ調整はまったく施されていない。外面にはカキ目調整に先行する平行タタキ痕が全体にみられ、特に下端から10cm前後の部分には体部を4回に分けて一周する明瞭なタタキ痕が観察される。この付近からやや下にかけては、最大1.2cmと器壁が厚くなっている、分割成

形に伴う接合痕と思われる。中位内面は、当て具痕を粗くナデ消し、最後に五指で大きく下から上へナデ上げている。外面は一部にタタキ痕も残るが、全面的にカキ目で覆われ、このカキ目が弱い指頭痕で消されている部分もある。上位は体部上端から7cmほどの範囲で、内面は明瞭なヨコナデ痕が水平に走行して当て具痕の大半を消している。外面にはやはりカキ目が全面に残るが、上端は頸部に続く最終的なヨコナデによって消され、その少し下はタタキ痕が一回する。

なお、破碎に伴う打撃痕が2ヶ所に観察され、体部上位に外面から、体部下位に内面から、石などの堅いものでたたき割られた痕跡を認めることができる。器高42.9cm、最大腹径42.1cm、口径21.5cm。

(34)は、NEトレントの(33)と同一層位(63層)で検出した杯蓋で口縁部と天井部の破片から図上復元した。天井外面はていねいなハラケズリを施し、口縁部は強いヨコナデ調整で丸くとめる。(35)は、Nトレント50層(暗黄色砂質土)出土のものである。内面は強いヨコナデ、外面は細かなカキ目が全面に残り、壺類か提瓶・平瓶などの体部片であろう。内面と器内は暗赤褐色系の色調を示す。

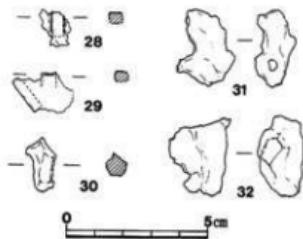
(古川)

(2) 歴史時代の遺物

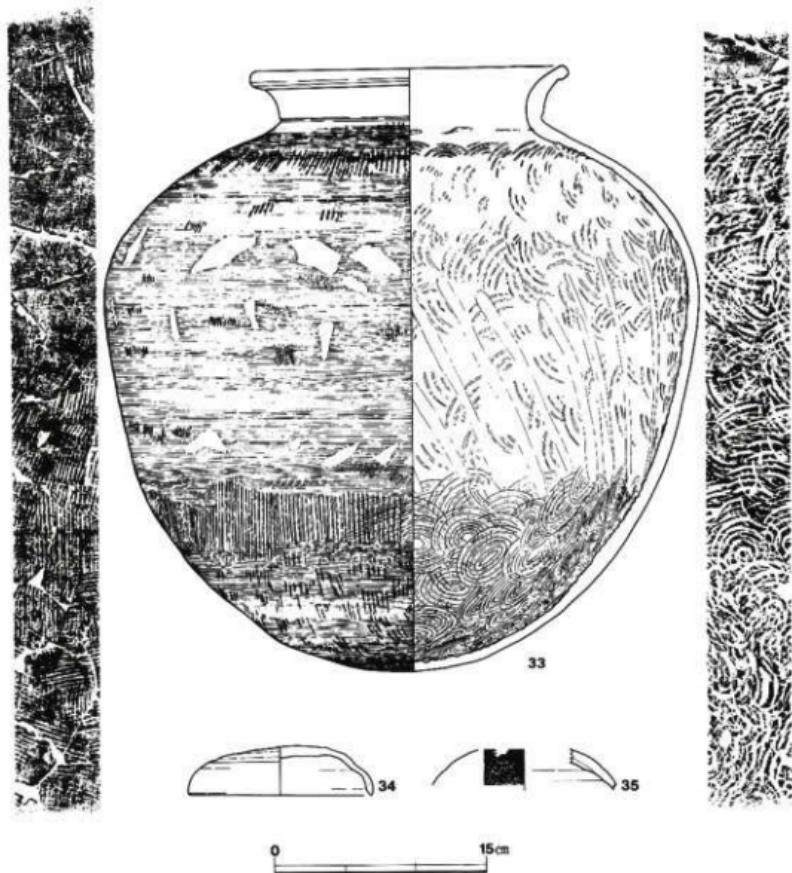
歴史時代の遺物は、中世の瓦器碗と土師器皿と近現代の磁器がある(第26図)。

瓦器と土師器はその多くが中世以降の盗掘等による搅乱層からの検出で、原位置を保ったものではない。また、残存状況は摩滅が著しく、微細片がほとんどである。おそらく、中世以降の自然的、人为的行為の繰り返しによって生じたものであろう。出土した瓦器はすべて碗で、基本的な復元作業の後、再度個体識別を検討し、図上復元を行った。

瓦器碗は口径13~15cm、器高3.5~4.0cmに収まるものと思われる。口縁端部の形態は、肥厚せず、やや丸みを有するもの(16)(17)(20)(21)(22)、肥厚し丸く仕上げられるものの(19)(23)(24)、肥厚しやや尖るもの(18)がある。外面の調整は、口縁部に1.5~2.0cmの範囲で強いヨコナデを施すもの(17)(20)(21)(23)、弱いヨコナデ調整を施すもの(16)(18)(19)(22)(24)が認められ、以下底部に至るまで指圧痕が顕著で調整の差異が明瞭である。(17)は口縁部のヨコナデに2段の調整を探っている。内面の調整は粗いミガキによって仕上げられている。また、内面の暗文は見込み部に平行線状のもの(16)や粗略化した螺旋状のもの(17)が認められ、口縁部に至るまで渦巻状の暗文を施すもの(23)もあるが、ほとんど圓線状のもので間隔も広く粗略である。底部の高台はほとんどが断面逆台形を呈し、貼付け痕が明瞭であるのに対して、(19)は入念な貼付けで逆三角形を呈している。焼成はあまり、色調は灰黒色~淡灰色を示す。器肉は淡灰白色である。時期的には



第27図 石室内出土鉄製品実測図



第28図 トレンチ内出土土器実測図

(16) (22) (23)はやや古相を帯びるものであるが、総体的に見れば、鈴木編年Ⅲ-3からⅣ-2に比定でき、13世紀末～14世紀前半に収まる資料であろう。

古墳から検出される瓦器は、本来の日常雑器としての機能とやや趣を異にしている。その用途については、石室の再利用に伴う副葬品、祭祀用品等が推測されるが、前述したように後世の攢乱が著しく、証左となり得る他の遺物、遺構の検出には至らなかった。

土師器で図化し得たのは小皿1点(26)のみである。復元口径約9cm、器高1.2cmを測る。内外面ともヨコナデ調整されており、口縁部は斜面上方に軽く引き出すようにまとめられている。淡

黄灰色を呈するが、横田洋三土師皿編年における褐色系小皿A2タイプに相当するものとみられ、使用年代は瓦器の時期幅ともふれ合う13世紀頃と推定される。

(27)は石室内攪乱土A層出土の高台を有する染付磁器碗である。外面底部に圓線が一条施されている。高台端部は釉の付着はみとめられない。近代の資料である。 (和田・後神)

(3) 鉄 製 品

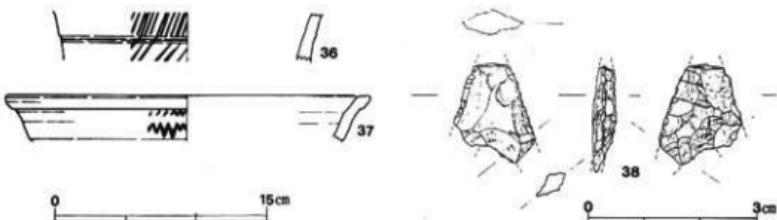
石室内で5点の鉄片が検出されている(第27図)。いずれも長さ1~3cm程度のもので、鉄釘と思われる。(28)(29)は断面方形を呈するが他は不明で、古墳の木棺に伴うものかどうかも確定できない。 (古川)

(4) 採 集 遺 物

調査の実施期間内に、調査事務所プレハブ周辺で若干の須恵器片を採集した。

(36)は壺頸部か器台脚柱部の破片と思われる。中央に2条の凹線、その上下にヘラ描き斜線文をめぐらしている。(37)は器台口縁部である。全体にヨコナデ調整の後外面に櫛描き波状文を施し、口端部は外面に段差をつくって肥厚させる。

また、調査終了後石鎚1点を採集した。(38)は、漢道端部南側で整地層中から採集した石鎚で、形態は凹基無茎鎚である。側縁は直線的にのび、先端に移行する。片縁は深形の細部調整によって整形され、一方の縁は荒い剥離調整の後、浅い細部調整が行われている。両面中央部には素材剥離面が残る。先端と両脚部を欠損し、残存長1.7cm、幅1.5cm、厚さ0.4cmを計測する。石材はサヌカイト製である。時期は弥生時代のものであろう。 (古川・和田)



第29図 採集遺物実測図

〔註〕

- (1) 中村 浩 「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑』 大阪府教育委員会 1978年
- (2) 鈴木秀典 「瓦器統の編年」『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 (財)大阪市文化財協会 1982年
- (3) 横田洋三 「出土土師皿編年試案」『平安京跡研究調査報告 第5輯』 (財)古代學協会 1981年

VII. ま と め

損壊を受けた岩ヶ平10号墳についての確認調査結果を要約すると、下記のごとくなる。

- ① 本墳は関係者の事情聴取結果のとおり、隣接地の造成工事の土置場となった当該地に工事事務所を仮設した際、その整地工事により大半を壊された。損壊は墳丘・内部構造の両者に及んでいた。
- ② 石室の残存位置はプレハブ事務所の南半部直下であるが、墳丘の部分を含めると概ねこの事務所と重複した形となり、プレハブ設営に際し、周囲に比べ異常に高まる古墳がまず削平の対象になったわけである。
- ③ 既存の墳丘実測図・石室実測図がないため、正確な値を求めるることは困難であるが、本墳の墳丘はこの地ならし工事により約1.5m削平され、既に露出していた天井石・上部壁石はことごとく崩されたことが判明した。
- ④ 重機により除去された石室用材のうち、石室空間に陥落したもの以外の多くは、2か所に投棄壙が穿たれ、そこに放り込まれたことが確認できた。両者は約10m隔たっており、当初は一つであったが、魔棄石材に対する容量の不足からさらにもう1か所掘られたようである。
- ⑤ 石材投棄壙からは、天井石と推定された巨石2石、奥壁と推定された板石1石をはじめ、石室壁体の主用材12~13石が発見された。これらは本墳の損壊前の石室遺存状況から知れる用石量とよく合致しており、したがって、原位置を失った石室用材の別地への搬出移動はなかったものと推定される。このことは、関係者の証言からも裏付けが得られた。
- ⑥ 石室は当初全壊されたとみる向きもあったが、丈高であった奥壁石を除いて、玄室・羨道の根石は残存していた。しかし、玄室右側壁を構成する最奥部の1石は、他の石より少し高めであったためか、既に重機で傾倒する状態にまで動いていた。
- ⑦ 石室は右片袖式で、損壊後の現状で次のような残存法量が得られた。

玄室長 3.5m 玄室幅 1.5m

羨道長 3.6m 羨道幅 1.1m

残存高 0.85m

このうち、羨道長については、敷地を画する堀により既に開口部が損壊を受けているため、あくまで残存長を示すにすぎない。石室の残存長は7.1mを測る。

- ⑧ 石室の平面プランは、有袖式でありながら退化傾向を有しており、型式学的には6世紀代でも新しい様相を帯びている。開口方向はほぼ真南である。
- ⑨ 根石は玄門石とそれに対向する石が大きく、また、奥壁最奥部の両側壁が大きい他はとくに

- 目立った石材はない。右側壁では玄室と羨道の横位置の用石法に大きさの違いが看取され、前者がやや大きいが、左側壁ではそのような傾向も認め難い。
- ⑩ 今回の損壊行為で抜去された主用石材は、過去の記録との照合から、天井石 3 石（築造当初のものではない）、奥壁 3 石、右側壁 11 石、左側壁 10 石前後を数えることがほぼ明らかとなつた。投棄壙で確認された石材との対応関係や使用面検討は数石について行い得たが、原位置を確定することは大半の石材についてこれを放棄した。
- ⑪ 墳丘に関しては、東西 10.5m、南北 13m 程度の規模をもつことが明らかとなった。古墳の破壊が墳丘の基盤部分までおよんでいないことが確かめられたわけである。墳高は 3 m 弱の数値を想定することができ、築造当初は 3.5 m はあったであろう。
- ⑫ 古墳築造面は地山そのものではなく、その上を被覆している旧表土を整地した面であり、地形の勾配から低い部分となる東半部では墓壙を造成することなく、列石によって同巧の役割を果たす墳丘内施設を構築するといった興味深い構造の一端が明らかとなった。
- ⑬ 本墳の築造時期は、出土した須恵器から 6 世紀でも末に近い頃と推定される。7 世紀になってからの築造も場合によっては考えられる。これは、石室の型式学的検討ともよく一致する。岩ヶ平支群の造営開始期より少し遅れた時期とみてよい。追葬の有無については、発掘結果から即断することはできなかったが、可能性を否定することはできない。
- なお、13世紀末～14世紀前半には、石室内で多数の瓦器が用いられる墓室の二次的な利用があったことも併せ判った。
- ⑭ 調査後、本墳の残存部はさらに継続して保護の対象とすることで地権者の了解が得られたため、墳丘部に採り入れたトレチを限定した。したがって、E 1 レンチで明らかにされた墳丘根部での土器祭祀など外部施設については、不明な点を多く残した。石室の下部構造に関しても未調査部分がかなりあることを断っておきたい。
- ⑮ 本墳の周辺は、搬入された置土が主体となっていることが判明したため、古墳損壊前の旧地形を露出させた。これにより新たに古墳の遺存が見込まれる地点が見出されたが、今回の調査目的が損壊状況の確認に主眼があるため、地形実測以外の調査を全く実施しなかったことを銘記しておく。

以上の確認結果を受け、関係者が協議して、本墳にはその存在を明確にすべく、解説板の設置と芝生による墳丘範囲の明示が行われることとなった（図版 18）。また、損壊を受けた石室の残存部には浜砂を入れて床部分を保護することとした。当該敷地には、本墳以外にも古墳やその他の埋蔵文化財の存在が予測されるが、それらの確認は、くり返し述べたように、今後に委ねたい。

（森岡）